

指名手配中の  $\alpha$  の逃亡  
犯が逃げ込んだアパート  
に  $\Omega$  カントが一人暮  
らしをしていて「通報  
する前にお前のヒート  
が来るな」と人質のま  
ま番にされる話

「っ……な、に……」

目が覚めたのか、眠っていたのかもわからない。確かなのは、六畳の部屋に充満する圧倒的なフェロモンと、自分の身体の内側がもう、手遅れなくらい疼いているということだけだった。

「動くな」

低い声。頭上から降ってくる。

都築瑛は薄暗い天井を見上げた。自分のアパート。自分のベッド。だが隣に、見知らぬ男がいる——いや、見知らぬわけではなかった。昨夜、ベランダの窓を蹴破って転がり込んできた男。指名手配犯。鷹取律。

五倍に増幅された感受性が、律のフェロモンを骨の髄まで叩き込んでくる。皮膚の下を這いずる熱。太腿の内側を伝うぬるい液体。シーツがもう冷たくない。自分の体温と、滲み出した蜜で湿っている。

——ヒートが、来てる。

「く、そ……っ」

歯を食いしばった。抑制剤は昨夜、全部割れた。タイルの上で溶けた。今月分が。来月分のカネもない。闇ルート次の入荷は五日後。

身体を丸めようとして、腹の奥がずくん、と脈を打つ。

「う……っ♡」

声が漏れた。勝手に。自分の意志じゃない。

律が身じろぎする気配がした。壁際に座ったまま、瑛から一番遠い位置。昨夜からずっとそうだ。ヒート前の $\Omega$ が目の前にいるのに、こいつは近づかない。触れない。 $\alpha$ として異常だ。

「……あっ♡ なん、で……お前のフェロモン、こんな……っ♡♡」

六畳間に二日分のフェロモンが溜まっていた。換気なんてできない。窓は割れたまま段ボールで塞いである。外から見えないように。逃亡犯を匿っている——匿っているのとも違う。人質だ。通報したくても、身体が先に壊れる。

「俺が出てけば収まるのか」

律の声。低い。感情を削ぎ落とした声。

「出てけるわけ……ねえだろ、指名手配の……くせに……っ♡」

瑛は毛布を引被った。身体を隠すように。だが毛布の繊維が肌に触れるだけで、全身に鳥肌が走る。乳首が布に擦れて、腹の底がきゅう、と締まった。

（やだ……身体が、勝手に……っ♡）

瑛は自分の身体を呪った。六歳の時からずっと呪ってきた。母親と同じ $\Omega$ の血。 $\alpha$ に依存し、フェロモンに膝を折り、番にされ、使い捨てられる——それが $\Omega$ の「普通」だ。瑛はそ

れを断ち切りたかった。だから闇の治験に手を出した。ヒートを消す新型抑制剤。三回の注射で完了するはずだった。

結果は最悪。感受性が五倍に跳ね上がった。電車で $\alpha$ とすれ違うだけで膝が笑う。だから夜勤を選んだ。人の少ない時間帯に、息を殺して生きてきた。

それが今、密室で逃亡犯の $\alpha$ と二人きり。フェロモン濃度は限界を超えていて、瑛の身体は——

「はっ……お……っ♡♡ やだ……勝手に、濡れて……っ♡♡」

太腿を閉じた。閉じた内腿が擦れて、その摩擦だけで声が出る。

（男なのに。男なのに、こんな……身体が勝手に $\alpha$ を求めるなんて……っ♡）

毛布の中で拳を握る。爪が掌に食い込む。認めたくない。認められない。瑛は男だ。男として生きてきた。 $\Omega$ であることを誰にも明かさず、抑制剤で身体を騙して、男として——

「おい」

律の声。近い。さっきより、近い。

「熱がやばい。三十九度はある」

「来んな……っ♡♡」

「来てねえ。お前がそっちに寝返り打ったんだ」

瑛は気づく。無意識に、律のいる方向に身体が移動していた。ヒートの身体が $\alpha$ のフェロモンの発生源に向かって這っていた。

「ち、が……俺は……っ♡♡」

（違わない。身体が、勝手に……こいつの方に……っ♡♡）

毛布が剥がされる。律の大きな手が毛布の端を掴んでいた。片手で。瑛なら両手を使う毛布を、こいつは片手で。

「見るな……っ♡♡」

「見てねえ。けど匂いでわかる。お前、限界だろ」

瑛は律を睨んだ。睨みたかった。だが目が合った瞬間、律の瞳の奥に灯っている色に気づいて、息が止まる。

律も——限界だ。

フェロモンを押さえつけている。二日間、ずっと。 $\alpha$ の本能を、力づくで。その証拠に律の顎が震えていた。こめかみに汗が浮いている。目が血走っている。

「……なんで我慢してんだよ」

瑛の声がかすれる。

「 $\Omega$ に暴行した男が、なんで」

律の目が揺れた。一瞬、何かを言いかけて——飲み込む。

「出さねえよ」

「嘘つけ。お前のフェロモン、もう抑えきれてねえだろ。なんで——」

「出さねえつってんだろ」

律の拳が床を叩いた。乾いた音が部屋に響く。

沈黙が落ちた。

瑛はベッドの上で身体を丸めたまま、律を見ていた。律は自分の右手を見ていた。床を叩いた手。手の甲に、火傷の癍痕がある。引き攣れた、不規則な形。コンロに押し付けたような。

律は拳を開いて、閉じて、また開いた。指を一本ずつ曲げている。自分の手が自分のものじゃないかのように。

——暴行犯が、なぜ自分の手を罰する。

「……その火傷」

律が顔を上げる。

「自分でやっただろ」

答えはなかった。律の手が膝の上で握りしめられる。関節が白くなる。

瑛は左腕の袖を見た。長袖の下に、三つの注射痕が隠れている。治験の痕。消えない。消したくて腕をかきむしった時期がある。消えなかった。

「……俺もな」

瑛が言う。

「消したい痕がある。消えねえけど」

律が瑛の左腕を見た。瑛はまだ袖をまくっていない。でも律の目が、そこに何かがあることを察している。

長い沈黙。窓の外で雨が降り始めていた。

「——三年前」

律が口を開いた。声から感情が抜け落ちている。

「俺は刑務官だった」

瑛は動かない。

「Ωの受刑者が——他の刑務官にやられてた。集団で。ヒート誘発剤を打って発情させて、番にして。何人も」

瑛の心臓が跳ねた。

「告発しようとした。証拠を集めた。——先に潰された。俺が暴行犯にされた」

律の声が掠れる。大きな手が膝の上で拳を作っている。

「それだけなら——まだよかった」

瑛は律の横顔を見ている。律の目は三年前を見ている。ここにいない。

「やられてたΩの一人が——俺に言った。『告発したら自分が法廷に立つ。番にされた記憶を全部喋らされる。それなら死ぬ』って」

瑛の呼吸が止まった。

「……そいつは首を吊った。俺が止める前に」

律が右手を見る。火傷の瘢痕。

「正しいことをしようとした手だ。この手で——人を殺した」  
雨の音だけが残る。

瑛の目から涙が一筋落ちた。ヒートの熱のせいだ。そう思  
いたかった。

律は——暴行犯じゃなかった。Ωを守ろうとして、守れな  
かった男。正しさが人を殺した。

瑛は自分の左腕を見た。長袖の下の注射痕。逃げようとし  
て壊れた身体。

（お前は正しいこととして壊した。俺は逃げようとして壊れた。  
——似てんだよ、お前と俺は）

口に出さない。まだ出せない。

「……なんで、俺に話した」

「わかんねえ」律が言う。「お前がΩだからかもしれねえ。  
……あいつと同じ」

「同じじゃねえ」

瑛の声が硬い。

「俺はあいつじゃねえし、お前に守ってもらう気もねえ。勝  
手に重ねんな」

律の目が瑛を見る。瑛は律を睨んでいる。——泣きながら。

「……ああ。すまねえ」

「謝んな。気持ちわりい」



瑛が毛布を被り直す。身体が震えている。ヒートの震えと、もう一つ別の震え。

律が壁際に戻る。また距離を取る。大きな手を膝の上に置いて、右手の火傷をじっと見ている。

夜が更けていく。雨は止まない。

瑛のヒートは、確実に進行していた。

三日目の未明。

瑛は自分の声で目が覚めた。

「あ……っ♡♡　お……っ♡♡」

身体が沸騰している。シーツの繊維一本一本が皮膚を擦って、全部が快感に変換される。腹の奥がどくどく脈打っている。心臓とは別のリズム。太腿の間がぬるぬるに濡れていて、シーツまで染みている。

本格的なヒート。抑制剤なし。五倍の感受性。二日間蓄積した律のフェロモン。

——もう、抗えない。

「く、そ……っ♡♡　やだ……身体が……っ♡♡」

腰が勝手に浮く。太腿が開こうとする。本能が暴走している。この $\alpha$ を受け入れろ。この $\alpha$ のものになれ。この $\alpha$ に

——

「う、あ……っ♡♡♡　やだ、やだ……こんなの……っ♡♡」

声が止まらない。涙が勝手に出ている。熱くて、苦しくて、  
身体の奥が空っぽで、何かで埋めてほしくてたまらない。

(男なのに……っ♡♡　こんな、雌みたいに……っ♡♡　濡  
れて、腰振って……っ♡♡)

男として生きてきたプライドが軋む。Ωであることを隠し  
て。なのに今、 $\alpha$ のフェロモンに曝されただけで、こうなっ  
ている。自分の意志は一切関係ない。

律が起き上がった気配がした。

そして——フェロモンの制御が、崩壊した。

瑛の身体が痙攣する。律のフェロモンが全開になった。二  
日間必死で抑えていた蓋が弾け飛んで、六畳間が $\alpha$ の匂いで  
爆発した。

「ひ、あっ♡♡♡　な——っ♡♡♡」

五倍の感受性が律のフェロモンを増幅して全身に叩き込む。  
脳の奥が真っ白に灼ける。思考が蒸発する。身体だけが勝手に  
反応して、腰が跳ね上がり、太腿が大きく開き、中からど  
ろりと蜜が溢れた。

「お前のヒート——おかしい」

律の声が掠れている。律も限界だ。瑛の凝縮されたヒート  
フェロモンがぶつかってきている。

「知ってる……っ♡♡　五倍だっ……つった、だろ……っ  
♡♡♡」

瑛の声が震える。もう虚勢も張れない。

律が立ち上がる。一步。その一步でフェロモンの濃度が変わる。瑛の身体がびくんと跳ねた。腰が浮く。本能が叫ぶ。来て。来い。中に入れ。——やめろ。やめてくれ。頭と身体が引き裂かれている。

「来る、な……っ♡♡♡」

叫びながら、身体は逆のことをしていた。背中が反り、腰が律の方を向いている。

律の大きな手が伸びる。瑛の額に触れる。

掌が瑛の額から髪の毛の生え際まですっぽり覆った。火傷の瘢痕が瑛の眉に触れている。手のひらが熱い。だが瑛の方がもっと熱い。

「三十九度じゃ、きかねえだろ……」

「あっ♡♡♡ さわ、る……な……っ♡♡♡」

額に触れられただけ。たったそれだけで、全身にぞくりと電流が走る。五倍の感受性が律の手のひらの温度を増幅して背骨に流し込む。

律の手が頬に移動する。親指の腹が涙を拭った。火傷の瘢痕が瑛の頬骨に擦れる。ざらりとした感触。硬い。瑛の肌とは全く違う、引き攣れた皮膚。

「やっ……♡♡ 手……でかい……顔、全部……覆われ……っ♡♡」

律の手のひらは瑛の顔の半分を覆い隠せるほど大きかった。指が長くて、関節が太くて、爪が短く切り揃えてあって。人を殴った手。正しいことをしようとした手。人を死なせた手。  
(……こんな手に触られてるのに……怖くないなんて……っ♡♡)

認めたくない。認めたら負けだ。αに依存したら、母親と同じ道を辿る。

もう片方の手が首筋に触れた。指が一本ずつ添えられていく。人差し指が鎖骨の窪み。中指が首の側面。薬指が——項腺の手前で止まる。

「ここに、触るぞ」

「触れ、たら……俺……もう……っ♡♡♡」

——律の薬指が、項腺に触れた。

「ひおぁっ♡♡♡♡」

瑛の全身が弓なりに反った。

項腺から噴き出した信号が背骨を一直線に駆け下りて、腰の奥で爆発する。声にならない声が喉から溢れた。太腿が痙攣して、内側からどろどろと蜜が溢れてシーツを汚す。

「そこ……だめ……っ♡♡♡ 項腺、触らないで……っ♡♡♡♡」